

世界の文学

川村二郎

著者略歴

1928年、愛知県に生まれる

1950年、東京大学文学部独文科卒業

現在、東京都立大学助教授

主な訳書

トーマス・マン『ブッデンブローク家の人々』(河出書房)

ムシル『三人の女』(河出書房)

ブロッホ『ウェルギリウスの死』(集英社) 他

限界の文学

© 1969 Kawamura Jiro

1969年4月25日初版印刷

1969年4月30日初版発行

著者 川村二郎

発行者 中島隆之

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町3の6

定価 640 円

Tel. 292-3711(代表) 振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

印刷所 東洋印刷 製本所 美行製本

目
次

I
文学の位置決定のための五章 9

II

保田與重郎論 29

経験と原理——ルカーチとベンヤミン 55

断章の美学——ベンヤミン 82

批評の生理——ルカーチとアドルノ 102

ヴァーグナーの没落——アドルノに即して

III

『死者の書』について——釈迦空論 133

虚実の帝国——『特性なき男』について 155

イシスとオシリス——ムシルと神話 183

始原への旅——現代神話文学論 202

虚構のリアリズム——浄瑠璃の世界 242

IV

複数形の現実 267

あとがき 285

装幀—広瀬 郁

限界の文学

I

文学の位置決定のための五章

1

サンボリスム以後のかずかずの尖锐な詩論の中でも、ホーフマンスタールの『詩についての対話』（一九〇四年）は独特な魅力をそなえた一篇である。オスカー・ワイルドの『芸術家としての批評家』あたりから直接の暗示を受けたと思われる、芸術を愛する二人の優雅な青年の対話という形式をとっているが、ワイルド流の挑発的な逆説や倨傲の誇示のために対話形式が選ばれているわけではない。詩における「象徴」という、どのように論じてみたところで恣意的な託宣の印象を完全に拭いさることとはできない、それゆえある意味では抽象的な論議の対象とするにふさわしからぬ主題を、二つの意見の対立によって作られた緊張の中で、対立を持続したまま肉感的に深化しようとする意図のもと

に、この「対話」はくりひろげられている。

さまざまな詩行の引用や巧緻な修辭が、時には華麗にすぎるとさえ感じられる全篇のうちで、最も強烈な感銘を残すのが、ちょうど中ほどにある、象徴の發生に關する仮説だということに大方の異論はあるまい。象徴を一つのものの他のものによる置き換え、つまり比喩としてしか考えることのできない青年に対して、もう一人のより深遠な思想の持主が、象徴とは交換不可能な独自の實在なのだと言つて聞かせる、そのところでほとんど唐突に「犠牲」についての物語がはじまる——

ぼくには初めて犠牲をささげた男がまざまざと目にうつるような気がする。彼は神々が自分を憎んでいるのを感じる。神々が奔流の水や山の石塊を彼の畠に投げ入れたり、森の恐るべき静寂で彼の心押しひしごうとするのを感じる……その時彼は、茅屋と心の不安との二重の暗黒の中で鋭い曲つた小刀に手を伸ばし、目に見えぬ恐るべき存在を喜ばせるために、われとわが咽喉から血をほとばしらせようとしたのだ。だが、不安と狂暴と死の接近に酔いしれて、彼の手はなかば無意識に、この時、あたたかい牡羊の毛にもう一度突きこまれた——この獣、この生、暗黒の中で息づく、あたたかい、かくも身近ななつかしい存在——突然小刀は獣の咽喉に閃き、あたたかい血が獣の毛皮と人間の胸や腕との上に同時にしたり落ちた。その瞬間、彼はそれが自分自身の血だと思つたにちがいない……一瞬彼はその獣となって死んだにちがいない、だからこそ、その獣は彼のために死ぬことができたのだ。獣が彼のために死ぬことができたということ、それが大いなる神秘、大いなる秘密にみちた真実となつたのだ……

これこそが象徴の起源であり、一切の詩の根元である。人間を外界からへだてている障壁が崩れ落ち、自己と他者とが魔的な交感のうちに合一する瞬間、そこに、同時に実体と暗号を兼ねる「象徴」としての詩が誕生する、というのである。

交感、遠くへだたつたものの連合、それがボードレール以後の近代詩の基本原理となつたことはいふまでもない。しかしそれがホーフマンスタールの場合ほどに、主客分化のラディカルな否認に立ち到つた例は多くなかろう。この否認と言語表現の否認、沈黙とは明らかに紙一重の差があるかなしだといえようし、事実、ホーフマンスタールのエッセイの中でも最も高名な『チャンドス卿の手紙』(一九〇一年)では、万有との異常な交感のために表現を喪失する詩人の苦悩が、『対話』とは正反對のネガティヴな基調によつて、重苦しく描きだされている。『対話』の讚歌風な長調と、『手紙』の悲歌風な短調は、いずれも一方を欠いては成立しえない特性を与えられて、不可分の連関を形づくっている。

しかし詩について語るのが、この文章におけるほくの意図ではない。ほくが語りたいのは、先ほど引用した『対話』の一節を同じように引用しながら、およそ思いもかけなかつたような照明をこの部分にあてて見せたある批評家のエッセイ、それをはじめて読んだ時の衝撃についてである。『対話』をほくが最初に読んだのは敗戦直後で、それからこのエッセイを目にするまでには十五年ほどの歳月があつた。その十五年のあいだ、この批評家、テオドル・W・アドルノが論を立てているような視点に、全く気づかなかつたわけではない。たとえばルカーチが「ヴェルヘルム二世の帝国主義時代の

抒情詩」といつた呼称で、リルケとゲオルゲを論ずるのを讀んだ際などに。しかしいかにも公式的に明晰なルカーチの裁断にひきくらべて、アドルノの批判ははるかに強烈な印象をぼくの心にとどめ、十二分になじんでいたつもりホーフマンスタールの詩的宇宙について、改めて思いを深めるよう強引にはいなかった。

そのエッセイ『ゲオルゲとホーフマンスタール』でアドルノがホーフマンスタールに見てとつているのは、要約すれば、美の秘儀を追いもとめる審美的志向が、既成の秩序を拒否して未聞の新しい価値を要請しながら、その努力の極限において、拒否しようとした当の既成秩序のただなかに没入してしまう、というパラドクスである。『詩についての対話』は「新ロマン主義の暗鬱な政治的可能性を包括した血なまぐさい象徴の理論である」。不安の念から詩人は、敵対する生の諸力に帰依しようとする。美の名において彼は、圧倒的に強力な事物の世界に自らを犠牲としてささげる。自らを放棄し、外界の事物が語りでる口と自ら化することによって、自己の救済を成就しようとする。事物を主観の象徴とするのではなく、主観を事物の象徴としようというのが彼の象徴主義だが、その結果は個の主体性を事物そのものにまで硬直させ、社会全体の物象化の傾向をさらに助長するにすぎない。この降服から極右のイデオロギーへ一直線の道を通じる。ホーフマンスタールの傘下からボルヒャルト、カロッサなどの右翼文学者が輩出したのは偶然でない、というのである。

このエッセイが書かれたのは一九三九年から四〇年にかけて、筆者の亡命地のアメリカにおいてだから、そこに右翼勢力に対する怨恨が色濃く出ているのは当然といえば当然であろう。アドルノの先輩格にあたる批評家ヴァルター・ベンヤミンは、やはり亡命先のパリからアドルノにあてた手紙の中

で、このエッセイを、今まで君が書いたうちで最良の文章と評価しながらも、そのホーフマンスタール像の不明瞭な点をいくつか指摘し、特に彼をファシズムに直接関連づけて考える見方には強い疑惑を表明している。しかしそのペンヤミンも、『対話』における犠牲の理論はまことに根拠薄弱な疑わしい説で、『チャンドス卿の手紙』で言語喪失の危機を仮借なく追究したホーフマンスタールが、その追究を中断し、危機をなしくずしに回避したところに『対話』のいかがわしさが生じたのだ、という具合に考えるのである。

これらの批評家たちの意見はほとんどぼくを圧倒しかねなかったが、一抹の疑問は残った。たしかにホーフマンスタールは、外界の事物の擅権のもとに敗北したのかもしれない、その敗北を強権への意図的な追随によって糊塗しようとしたのかもしれない。しかしもしこの事物の擅権が社会的な必然にもとづいているならば、必然に抵抗することは、たとえ人間のある種の強さを証するとしても、文学の存在のための保証にはならない。「ホーフマンスタールは倫理的に挫折し、それゆえにまた文学的にも挫折した」とペンヤミンはいう。文学に対して生涯きわめてアンビヴァレントな関係を保っていたペンヤミンではあるが、このいい方は、『複製技術時代の芸術』（一九三六年）の末尾で、「よし世界は亡ぶとも芸術は栄えよ」というのがファシズムの宣言であり、芸術至上主義の結論であると述べている時と同様に明快である。しかしこの種の明快な断定は、たとえば「世界の栄ゆるためならば芸術は亡びよ」というだけの覚悟に裏づけられていなければ、それにふさわしい挑発力を持つことはできまい。ペンヤミンはその点において曖昧である。少なくとも、「血なまぐさい」犠牲の説を立てた時のホーフマンスタールが、より深い次元で文学の位相を捉えようとしていたことは確実だと思われ

る。

2

外界の圧力が法外な強さにまで膨れあがる時、それに対する内界、つまり個人の反応は、たとえ現象としては一義的に明白なものがあるうとも、その内実は必ずしも一義的な裁断に耐えるものではない。たとえば、反撥か順応か、といったことすら、仔細に眺めれば眺めるほどさだかには見きわめたいのである。

見きわめがたいものでもあえて即座に見きわめてしまわねばならない場合はたしかに存在する。見きわめることがただちに生死にかかわるような立場に立たねばならぬ場合がある。しかし、人生のあらゆることがただちに生死にかかわるわけではない。

つまりたとえば、何かを見て、それについて語るということ。見られたものが思量を絶した激烈なエネルギーをはらんでいる場合には、それについて語ることが、そのエネルギーの活動に荷担し、活動の一部となるようにみえることがあるかもしれない。だが、もし実際に、ある事実の表現が事実そのものと合体するとすれば、それはもはや表現の名に値しないだろう。

もちろんこのように考える立場は、事実から独立した「表現」にはたしていかなる意味があるか、と問う立場を前提にはしていない。表現の意味乃至価値ではなく、その必然性を確認する立場である。ゴンゴラ三百年祭の記念講演で、ロルカが簡明にいつてのけたことばをここで引用すれば足りる。